

「わたしについて来なさい」

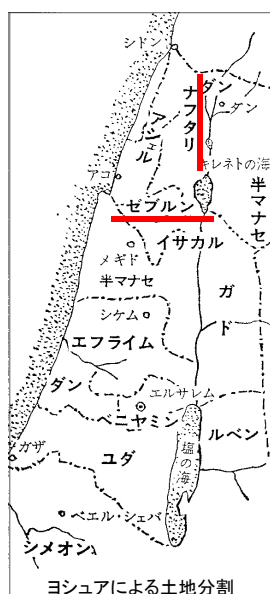
(マタイ4:12～25)

挽地茂男

2020.1.26 日本基督教団千歳丘教会

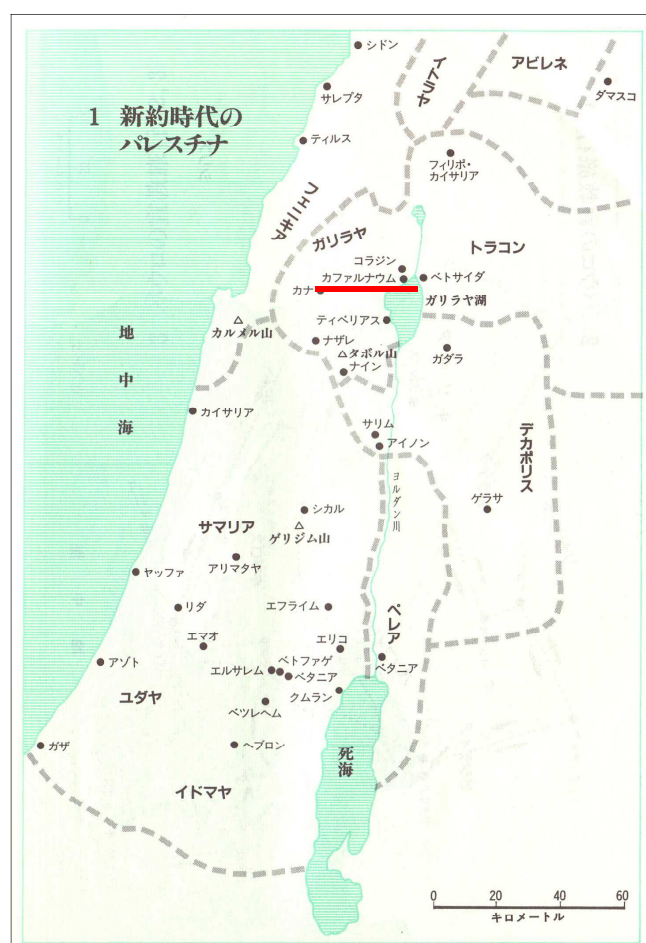
本日わたしたちに与えられた福音書の箇所は、荒野での悪魔の誘惑を退けたイエス・キリストが、ガリラヤで伝道を開始された最初期の出来事を物語っています。始まりの12-17節はその宣教活動の基本的な特色を要約している福音書記者マタイの「まとめの句」であります。マタイがマルコの記事より長くなっているのは、預言の成就というテーマが追加されているからです。

4:12 イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。4:13 そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。4:14 それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。4:15 「ゼブルンの地とナフタリの地、／湖沿いの道、ヨ



ルダン川のかなたの地、／異邦人のガリラヤ、4:16 暗闇に住む民は大きな光を見、／死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」4:17 そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

主イエスはナザレを離れて、カファルナウムに住みます。カファルナウムはその後、主イエスのガリラヤ伝道の拠点となります。ナザレからカファルナウムへ。場所の移動が預言の成就として語られています。預言はイザヤの預言です。イザヤ書8





章 2 3 節－ 9 章 1 節〔口語訳・新改訳、イザ9:1-2〕。

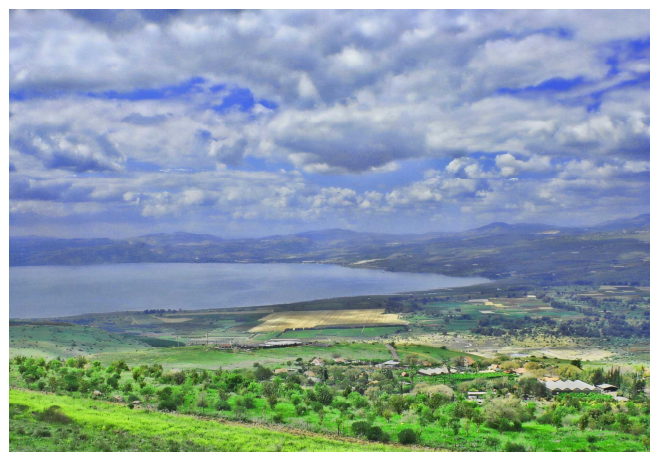
イザ8:23 先にゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが、後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。

9:1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。「ゼブルンの地とナフタリの地」とは出エジプトをしてカナンの地に入った、イスラエル 12 部族のうちの「ゼブルン族」と「ナフタリ族」に分け与えられた領土を指します。後のガリラヤ地方に当たります。

パレスチナの多くの地域と同様、ヘレニズム期のガリラヤはユダヤ文化と異邦人文化の混交した土地でした。ユダヤ人はおそらく少数派であった可能性もありますが、マタイは人口統計によってではなく、このイザヤの言葉を基礎にしてガリラヤを「異邦人の地」と考えています。ナザレは旧約聖書のゼブルン族の領土にあり、カ

ファルナウムはナフタリ族の領土にありました。どちらともガリラヤにあり、それが後に、ヘロデ大王の息子ヘロデ・アンティパスの領土になったのです。ガリラヤは、イスラエルの最北部の地方、宗教文化的にはエルサレムおよびユダヤ教の主流からは侮蔑され続けた地域です。しかし神は、その救いを実現するためにガリラヤを選ばれたのです。「異邦人のガリラヤ」

（イザヤ8:12，Ⅰマカ5:15，マタ4:15）という呼び名は、ガリラヤが侮蔑の対象とされていたことをよく示しています。しかし主イエスの出現によって、この「異邦人のガリラヤは、栄光を受け」（イザ8:23）、「闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝」（イザヤ9:1）き渡るのです。主イエスの登場とその動きはまるで「地上を照らす



神のサーチライト」のようです。そしてナザレからカファルナウムに移動した「そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた」(4:17)のです。

このガリラヤ
宣教の第一声

「悔い改めよ。

天の国は近づいた」というイエ

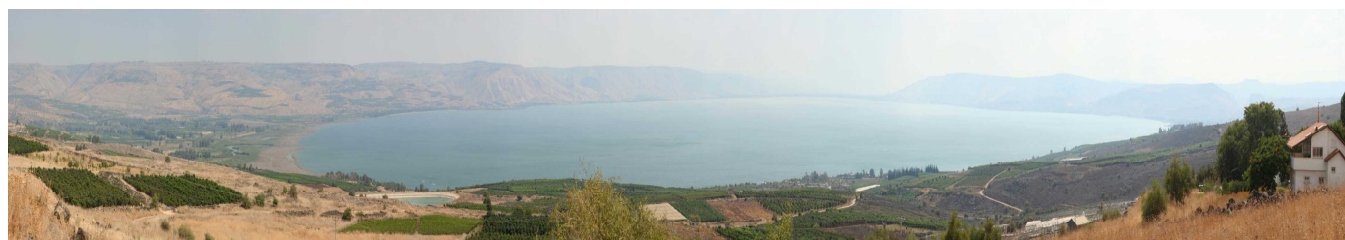


スのメッセージの「天の国は近づいた」という表現に使われる「近づいた」という言葉は、現在完了形〔エーングケン〕で表現されており、その文法的な機能がよく効いています。〈現在完了形〉は過去を現在に開く時制といわれ、単なる過去形（アオリスト形）とはちがい、過去を語りつつ、過去を現在化します。そのため、過去の事柄を取りざたしながら、談判や評決を下す裁判や法廷の文書によく現れます。この現在完了形のニュアンスを手っ取り早くつかむためには、過去形の表現に「では、

どうする」という言葉を付加して読めばほぼ理解することができます。つまりマタイの文章では、「天の国は近づいた。では、どうする」となります。つまり天の国の接近に対して、「では、どうする」と聞き手に迫る表現になっているのです。

「天の国は近づいた」というイエス・キリストのメッセージにおいて重要なのは、その現在完了形の用法に現れているように、人間が今やイエスとの出会いを通して神の国に不可避に直面し、それに対する態度決定を迫られている、ということなのです。その態度決定とは、「悔い改め」ること。神に立ち帰ること、すなわち福音への信仰が求められているのです。

「悔い改める」（メタノエオー）という言葉は、基本的に「方向転換」を、つまり神への方向転換を意味する言葉ですが、気仙語訳聖書〔ギリシア語から気仙沼地方の方言に翻訳された聖書〕ではこれを「さあ、心をばスッパリ切り替



ガリラヤ湖全景

えろ」と、態度決定を迫るニュアンスをうまく訳出しています。

こう見てきますと18節以下の最初の弟子たちの召命〔弟子として召されるという出来事について〕の記事は、主イエスとの出会いを通して、態度決定をした最初の人たちの物語として読むことが出来ます。18－20節。

4:18 イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。4:19 イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。

4:20 二人はすぐに網を捨てて従った。

ヨハネ福音書を愛読される方は、ヨハネの弟子の召命の記事がマタイ（およびマルコ）福音書のものとずいぶん違っていることにお気づきでしょう。ヨハネ福音書の記事ではアンデレは最初は洗礼者ヨハネの弟子で、洗礼者ヨハネがイエス・キリストを指して「見よ、神の小羊」と言うと、別の弟子と二人でイエスの泊まっておられるところまでついて行って、イエスがメシアであることを確信し、その後自分の兄弟のシ



ラ・トゥール「聖アンデレ」

	マルコ3:16-19	マタイ10:2-4	ルカ6:14-16
1	シモン (ペトロ)	シモン (ペトロ)	シモン (ペトロ)
2	ヤコブ (ゼベダイの子、渾名「雷の子」)	アンデレ (シモンの兄弟)	アンデレ (シモンの兄弟)
3	ヨハネ (ゼベダイの子、渾名「雷の子」)	ヤコブ (ゼベダイの子)	ヤコブ
4	アンデレ	ヨハネ (ゼベダイの子)	ヨハネ
5	フィリポ	フィリポ	フィリポ
6	バルトロマイ	バルトロマイ	バルトロマイ
7	マタイ	トマス	マタイ
8	トマス	マタイ (徴税人)	トマス
9	ヤコブ (アルファイの子)	ヤコブ (アルファイの子)	ヤコブ (アルファイの子)
10	タダイ	タダイ	シモン (熱心党の)
11	シモン (熱心党の)	シモン (熱心党の)	ユダ (ヤコブの子)
12	イスカリオテのユダ (引き渡した)	イスカリオテのユダ (引き渡した)	イスカリオテのユダ (裏切り者)

モン・ペトロをイエスの許に連れて行ったと記されています。実は弟子たちの召命の記事は、キリスト教の初期の文書にはいくつかのヴァリエーションがございます。ルカ福音書の召命の記事も少し違います。つまり福音書記者マタイが基本資料としたマルコ福音書は、旧約聖書の預言者エリシャの召命の記事を下敷きにして、ヨハネに見る様な弟子になったいきさつの詳細を思いきってカットして、弟子になることの本質を短い物語の中に凝縮したのです。その物語の焦点は〈呼びかけるイエス〉と〈呼びかけに従う弟子〉に置かれます。召命の出来事はこの両者の関係の中で起こるのです。

では弟子とはどういう存在でしょうか。弟子とは、まず第一に、主イエスと同じ道を歩む者のことでしょう。〔しかも自分の十字架を負って。マタ16:24〕。召命の出来事とは、イエス・キリストとの出会いを通して、主と同じ道を歩む態度決定をするという出来事のことです。それは単に牧師や司祭になるということを意味しているわけではありません。使徒言行録は、初期の信仰者を「この道の者」と呼び、イエスに従う者たちの信仰を繰り返し「この道」と表

現しています（6箇所：使9:2, 19:9, 19:23, 22:4, 24:14, 24:22）。信仰は具体的な歩みなのです。使徒言行録の中のパウロは「わたしはこの道を迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ、殺すことさえしたのです」（22:4）と語ります。〔パウロは殺人者だとルカの文書は伝えます。



デューラー「四人の使徒」(部分)

彼は迫害の現場にいが、迫害を加えている者たちの着物を預かっただけだと、小さな記事(使7:58)をとりだして彼を弁護する必要はないでしょう。おそらく彼の言う通りだと思います。少なくともパウロの自意識においては。それが彼の十字架による「赦し」の恵みの深さにおいて対応しています。なにはともあれ〕彼はそのように語り、また「ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった」（9:2）と語ります。しかし「この道」の迫害者であったパウロがや

がて「**この道**」を歩む者に変えられるのです。召命——それは人生の転



ペトロの召命教会

換の時であり——主にあってわたしの「道」が始まる時、道が出来ていく出発点でもあるのです。

弟子とはどういう存在なのでしょう。その第二に、主に対して正しい位置にいる者のことでしょう。主イエス・キリストは言います。「**わたしについて来なさい**」(v. 17a)。正確には、「わたしの後ろに来なさい」(デウテ・オピソー・ムー)。この表現の中心は「～の後に」(オピソー)という前置詞で、弟子たちが本来居るべき位置を指し示しています。つまり〈オピソー・ムー〉「イエス・キリストの後ろ」です。イエス・キリストの後ろ、そこが弟子のいる場所なのです。弟子たちの召命の場所は「主の後ろ」にあるのです。主はご自身が召した者に「あなたの道はわたしの後ろにある」と言われるのです。

「わたしの後ろ」(オピソー・ムー)という言葉はマタイ(マルコ)福音書の中でかなり重要な意

味を持っているのですが、マタイ福音書の前半のクライマックスにこの言葉が使われています。フィリポ・カイサリアで弟子たちが、「あなたがたはわたしをだと言うのか」と主イエスに問われると、ペトロが代表して「あなたは生ける神の子キリストです」と告白します。すると主イエスは、その信仰の上に教会を建てるとペトロを祝福し、天国の鍵を託します。そのペトロの見事な信仰告白と主イエスの祝福の直後、主イエスは自らの受難を予告し始めます。16章21－23節。

16:21 このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。16:22 すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」16:23 イエスは振り向いてペトロに言われた。「サタン、引き下がれ(ヒュパゲ・**オピソー・ムー**・サタナー「下がれ。わたしの後ろだ。サタン」)。あな

たはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」主イエスは厳しくペトロをたしなめて、ペトロが——つまり召命を受けた者が——いるべき正しい位置を〔逸脱したことを〕示しているのです。召された者は主の後ろに（オピソー・ムー）に**いるべき**なのです。弟子の道は主イエスの後ろに開けていくのです。わたしたちは自分自身の道に迷い、道を探るとき、その道は主イエスの後ろにあるでしょう。先が見えないとき、主に召された者はそこ——主の後ろ——にしかそれを見いだすことがないのです。

高村光太郎の「道程」という詩をご存じでしょう。この詩は光太郎の人生における態度決定を表明した凜々しい詩です。

「道程」という詩が表題作として収められた詩集『道程』の前半は、ネガティブで反逆的、ヤケクソな詩が多く収められています。それらの詩は、光太郎が24歳から27歳にかけて、ニューヨーク、ロンドン、パリ、イタリアの留学から帰国したあとの荒れすさんだ気持ちを反映しています、しかしその後半は表題作「道程」など、

—『道程』—

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
ああ、自然よ父よ
僕を一人立ちにさせた広大な父よ
僕から目を離さないで守る事をせよ
常に父の気魄を僕に充たせよ
この遠い道程のため
この遠い道程のため

自然賛美や再生への期待といった前向きな雰囲気の色濃くなります。帰国後の光太郎を取り巻いていたデカダンス（頹廢的な雰囲気、墮落）や葛藤は姿を消して、「自然」を媒介として、世界を肯定する（受け容れる）トーンが主調をなしてきます。「ああ、自然よ／父よ」。

この「道程」という詩は高村光太郎31歳から32歳になる大正3年（1914年）に発表されており、この年の12月に長沼智恵子（『智



高村光太郎「自画像」



高村光太郎「手」1918

恵子抄』の智恵子)と結婚しています。「道程」は道のり、行程のこと。「人生の歩み」を示しています。雄大な自然に支えられ、まだ誰も歩んだことのない道程を歩いて行こうというのです。「父よ」とか「僕を独り立ちにさせた広大な父よ」という表現に光太郎の関心の強かったキリスト教の影響も指摘されていますが、この詩の主調音は高村光太郎の人生に対する、またその人生の道を歩もうとする決意〔態度決定〕の表明にあります。

高村光太郎は「僕の後ろに道が出来る」と詠いました。まだ誰も人が踏み行ったことのない道、前人未踏の道を行こうとする気概を歌います。それに対して、主に召された者の道は、つまりわたしたちの道は、主イエスの後ろに出来るのです。

弟子とはどういう存在でしょうか。第三に、主の召命に生きる者のこと



でしょう。主イエス・キリストの召命は、わたしたちに態度決定を迫ってきます。何故でしょうか。その召命に目的があるからです。マタイのイエスはこう語ります。「わたしについて来なさい。わたしはあなたがたを人間をとる漁師にしよう」〔新共同訳は原文の「わたしがあなたがたを」の部分を出していない〕。主イエスは――わたしがあなた方を人間をとる漁師にしよう――「わたしが…する」と語られます。それは弟子の道が、単なる①自己実現の道ではないことを示しています。つまり②キリストが主体だということです。しかしこれは、③わたしの一人の個としての存在や個性が無視されるということではありません。わたしたちは、自分のことを一番知っているのは自分だと思っているのではないのでしょうか。わたしがいかなる存在であるかは、わたしたちを造られた方が一番ご存知なのです。わたしたちを造られた方がキリストに従えと命じられるとき、④わたしたちはキリストに従うことによってキリストを知るということです。わたしたちは人間であっても共にいることに

よってその人をより良く知るので
す。万巻の書物を読破したとして
も、キリストを知るのは、ただ、
キリストに従うことによるので
す。つまりは、神の召命の道とい
うのは、わたしたちを一番生かす
道のことなのです。キリストの道
は同時に生命なの道です。パウロ
の経験は、その道が人を本来の自
分として生かし、主イエス・キリ
ストの働きに真に参与することを
可能にし、主との生きた深い交わ
りに至る道であることを証言して
います。そこには主イエスとの一
体性が顕著に表現されてきます。

パウロの言葉を見ましょう。

●「わたしたち〔あなたがた〕の
うちに働きかけて、その願いを起
こさせ、かつ実現に至らせるのは
神であって、それは神のよしとさ
れるところだからです」(フィリピ
2:13)。神の主体(働き)とわたし
たちの主体(願い)が一致します。

●「そこでわたしは、神のために
働くことをキリスト・イエスにあ
って誇りに思っています。キリス
トがわたしを通して働かれたこと
以外は、あえて何ももうしません。
キリストは異邦人を神に従わせる
ために、わたしの言葉と行いを通

して、またしるしや奇蹟の力、神の
霊の力によって働かれました。」
(ローマの信徒への手紙15:17-19)
わたしたちは主体的に言葉を発し
行動します。神はそれを通して主
体的に働かれるのです。

●「生きているのは、もはやわた
しではありません。キリストがわ
たしの内に生きておられるので
す。わたしが今、肉において生き
ているのは、わたしを愛し、わた
しのために身を献げられた神の子
に対する信仰によるものです」(ガ
ラ2:20)。パウロは、自分の内に
生きているのはもはや自分のちっ
ぽけな命ではなく、キリストの絶
大なる命だと語ります。「わが内
に生きるキリスト。」パウロの経
験の言葉です。

「人間をとる漁師」である主イ
エスは、弟子たちの古い職業を利用
して、彼らの新しい働きを説明
しました。しかし「人間をとる漁
師にしよう」と言われた弟子たち
は、この時点

では「人間の
漁師」がどん
なものなのか
分かってはい
なかったはず



です。それにもかかわらずシモンとアンデレは、そしてさらにこの



ピーターフィッシュ(ペトロの魚)

直後にヤコブとヨハネは、「すぐに…〔すべて〕を捨てて従った」〔新

共同訳「**すぐに、舟と父親とを残してイエスに従った**」〕（22節）

と記されています。この無謀にも見える決断は、いわば召した方の真実さに対する信仰告白です。信仰は往々にしてその様な内容を持つものです。そしてその服従によって四人の漁師の新しい歩みが始まるのです。亡くなったわたしの父が口癖のようにして口にした聖書の言葉です。「神の賜物と召命は変わることがない」（ロマ11:29 新改訳）。新しい一週間も、主のみ足の跡を歩んでまいりましょう。祈ります。

2020.1..26 日本基督教団千歳丘教会

